

アルベール・ドマンジョンの集落論に憧れて ソルボンヌ（パリ大学）に留学

谷 岡 武 雄 *

I. 第二次大戦終結前後の地理学界

地理学の研究分野は、伝統的に自然地理学・人文地理学・地誌の3分野に分けられる。地理学の研究を志す者はいずれも、自然・人文のどちらかを選び、日本または外国の地誌研究を進めるのが、私が地理学分野を志したころの常識であった。私は人文地理学とくに歴史地理学とヨーロッパ地誌とを選んだ。

そのきっかけは、ドイツ語修得にあったと言うと、奇異に思われよう。私は心理学がとも好きであった。大学へ進むためには、当時立命館大学に設置されていた2年間の大学豫科を経なければならぬ。豫科ではドイツ語を徹底的に学んだ。3名の先生が教えて下さる。その中の一人は哲学者であった。私は教室では好んで「つばかぶり族」となり、率先して、先生の質問に答えた。やかましい京阪電車の中では運転室の近くに立ってドイツ語の発音を練習し、三条駅から立命館の広小路キャンパスまで往復する時間は、動詞の不規則変化の練習にあてた。gehen（歩く）→ ging → gegangen と。

恩師の藤岡謙二郎先生が、私を立命館大学

文学部に採用して下さった理由は、「お前はドイツ語ができるから」であった。何が幸いするかはわからない。何事もまじめにやれば道おのずから通じると、いうべきか。

「初心忘れるべからず」と、よく言われる。私の初心は心理学にあった。当時の心理学界では、コフカ（K. 1886 ~ 1941）やケーラー（W. 1887 ~ 1967）などのゲシュタルト理論の全盛期であった。私もこれらのドイツ学派にあこがれたが、原書は入手できなかった。英訳本を読んだようにも思う。心理学への志向は、今日人文地理学・歴史地理学の基礎となっているようにも思える。

第2次大戦中の日本における地理学界は、多少ともナショナリズムの傾向がみられ、京大・地理の小牧實繁先生は、『日本地政学』の樹立を宣言され、スメラミコト（天皇）の祖は中東地域に住む「スメル」族だとまでおっしゃったが、同調者はほとんどいなかった。

藤岡先生は京大考古学教室の出身であったため、実証を重んじられ、京大地理学教室のふんいきから、遠ざかっておられた。

大戦終結以前の地理学界では、いわばドイツ学派というべきか、ドイツ地理学者の影響

* 立命館名誉役員、立命館大学名誉教授

キーワード：アルベール・ドマンジョン、フランス学派、ソルボンヌ、地理学研究所、パリ、ウィーン、エチオピア高原

Key words : Albert Demangeon, école de France, Sorbonne, Institut de géographie, Paris, Wien, plateau de Ethiopia

が圧倒的であった。人文地理学ではラッツェル (F, 1844 ~ 1904)、自然地理学ではフンボルト (A. von 1769 ~ 1859) およびリッター (C. 1779 ~ 1856) の著作が日本に紹介され、戦後京大・地理学教室を復興された織田武雄先生が立命館地理学科での恩師であったおかげで、同教室に通ってラッツェルの原書を見せて頂き、辞書でゆっくりと読ませて頂いてノートを執った。

そのころ同教室出身の岩田慶治さんが、カール・リッターの原書をすべて読んだとおっしゃったので、よくぞあの退屈な原書を読んだものだと、改めて感心した。しかし、中には原書を明示しないで翻訳し、みずからの著書であるように次々と出版する横着な人物も見出され、これでは学界の恥ではないかと思った。

そのころ私は集落地理学に強い関心をいっていた。ドイツ学派では、集落の平面形態に焦点があてられていた。孤立荘宅 *Einzelhof*、路村 *Wegedorf*、環村 *Rundling* … というようなことであった。これでは個々の集落の勢力圏とかネットワークなどが考慮されない。機能的が無視されている。私はドイツ学派の集落論に、魅力を感じなくなってしまった。

II. フランス学派への志向

集落研究でドイツ学派に飽きた私は、どうすれば良いのか。イギリス人学者の研究には魅力を感じられない。アメリカではフロンティアの西漸で歴史を説くのが常識となっていたが、これはヨーロッパには適用できない。ということになると、フランス学派へ志向せざるをえない。

私は意を決して関西日仏学館へ通って、フ

ランス語を学ぶことにした。週3回、私は立命館大学での講義のあと、熱心に学館でフランス語を修得した。当時、立命館のメインキャンパスは広小路にあり、ここから北・東・南・東と加茂川を渡って15分で学館へ行くことができた。この場合も「ツバかぶり族」であった。初級・中級・上級と進み、約5年をかけて自信がつくようになった。講師はすべてフランス人で、教室へ入ると、すべてフランス語で教えてくれる。

上級生のころ、アンドレ・ブリューネさんに教えて頂いたのは、まことに幸運であった。彼はソルボンヌの東洋文化研究所の出身で、日本語がたくみである。しかも好都合なのは、地理学を専攻しておられ、当時もソルボンヌの地理学研究所のスタッフを知っておられた。これは有難い。

そのころ立命館大学においても、教員の海外留学制度が設けられた。期間は6ヶ月間で、都合により延長することができた。文学部では、哲学科の山元一郎さんが第1回で、私は第2回ということになった。私の家庭は、家内と長男・次男・長女の合わせて5人で、全員海外留学に賛同してくれた。

いよいよパリのソルボンヌで、アルベール・ドマンジョン *Albert DEMANGEON* 教授に直接お目にかかり、その集落論に関して見解を聞くことができる。彼は単なる平面形態ではなく、個々の居住単位の集中と分散をメインテーマとする。味気ないドイツ学派と異なり、機能的ではないか。私は魅力を強く感じた。

そうは言ってもフランスは遠く、容易に行くことはできない。今ならば関空または成田空港から8~9時間でパリのシャルル・ド・ゴール空港に到着できるが、私の初めて渡航

したところは、シベリアルートもポーラールートもなく、南回りのただ1本のルートしかなかった。私はこのことを逆手にとって、ゆっくりと各地を見学することにした。1958年5月上旬、列車で東京まで行ってホテルに宿泊、翌日ただ一つしかなかった国際空港の羽田から、KLM航空に搭乗した。ルートはマニラ→サイゴン→バンコク→カルカッタ→ボンベイ、インド航空に乗り変えてアデンに到着。この地は「アラビア半島」最南端の海港で、かなり北東方の遠くから水を引いてオアシス都市となっており、住民はエデンと発音するので、旧約聖書創世記の「エデンの園」を思わせた。極度に乾燥しており、夜は天井に吊るされた大きな扇風機を一晩中廻わしても、寝つかれなかった。これではアダムもイブも逃げ出したはず。昼間に若干市内見学を行う。市中を行くロバに大きな水筒を乗せた水売り商人、裸地で不気味な墓地、ひどい乾燥で容易に崩れない塩の山などが目についた。

アデンからはエチオピア航空に乗りかえ、ジプチ経由でエチオピアの首都、アディス・アベバにやっと到着した。機内の乗客はエチオピア貴族らしいのと私の2名だけ。これには驚いた。この首都は、標高 2440 m の高原に立地し、赤道に近いが涼しく感じる。6月には雨期に入り、物すごい雨が降る。私はギオンホテルに約一週間宿泊し、政府の顧問を勤めておられた旧軍人の池田純久さんに、ずいぶんとお世話になった。高原は深い谷に刻まれており、交通は不便である。

アディス・アベバからはカイロへ行き、ここからアテネとブダペストを経てウィーンに着いた。そこではウィーン商科大学の学生たちとウィーン森内のフィールドワークを行

い、夕刻に、ウィーンのおペラ劇場で『アイーダ』の観劇は、感激であった。ウィーンではシャイドル博士をはじめ商科大学のメンバーにいろいろとお世話になった。

ウィーンまで来ると、当時封鎖状態にあったベルリンへ行かないのはおかしい。南のミュンヘンと北のハンブルクとからのみ、航空路が開かれていた。私は南から入り、北へ出た。東ベルリン見学のバス旅行があり、出発時の手荷物検査があった。名所ばかりを案内された。西ベルリンの市民は、苦笑しながら、いずれそのうちにベルリンの壁はつぶれますよと、私に言った。

ハンブルクへ出たあとは、アムステルダム経由でパリの空港に、6月7日にやっと着いた。私のノートには飲食の事を記していないのは、うかつと言うべきか。羽田空港を出発して、1ヶ月余を費してパリに着いたことになる。

III. ソルボンヌの地理学研究所

ソルボンヌとはパリ大学のことである。13世紀の聖職者・神学者ソルボン (R. de Sorbon) が、貧しい聖職者のために神学校の共同体を1242～57年に創設し、みずからも神学を教授したうえに、教員・学生たちに宿舎を提供した。これがソルボンヌ大学の母体となったわけである。

パリ市・大都市圏への人口集中が激しく、これに対応してパリ大学は13に分かれた。これらのうちソルボンヌの名称が残っているのは、パリⅠのパンテオン・ソルボンヌ、パリⅢのソルボンヌ・ヌーヴェル、パリⅣのソルボンヌの3箇所である。パリ市・パリ大都市

圏では、現在教育・研究施設が130箇所に分かれ、学生総数は一説によると30万人に及ぶという。これらを三つの連合体にまとめる計画もあるといわれる。

さてソルボンヌと呼ばれる建造物は、セーヌ川南岸の5区、東側はやや広いサン・ジャーク街路、西側は狭いソルボンヌ通りに挟まれ、北北東～南南西方向を軸とする長方形となっている。私の留学当時は北のやや低い方は文学部、南の高い方は理学部となっていた。西側の入口から中庭へ入ると、学部の仕切りと思われるあたりにいずれも北向きで、文豪ヴィクトル・ユゴー（1802～85）と微生物学者のルイ・パスツール（1822～95）の立像が見られる。このため、中庭はパリの観光名所でもある。

地理学研究所は、この建物にはなく、やや南に離れて、サン・ジャーク通りに沿うが、狭い西北西～東南東走のピエール・エ・マリー・キュリー通りとの交差点に入口を向けた4階建てであった。私はソルボンヌ通りの月極めペンションに宿をとり、そこから毎日研究所まで通った。私には手下げカバンがなく、風呂敷に必要な品を包んで歩いた。研究所ではさげすまれることなく、かえって名案だと誉められた。

入口で係員にたずねると、とにかくエレベータで2階に上がり、ビブリオテック（図書室）で聞けという。そこには大柄の係員がおり、アルベール・ドマンジョンのことならば、彼の娘婿、エイメ・ペルピユー教授に聞きなさいと教えてくれた。ペルピユー教授は、非常に喜んで下さり、ドマンジョンについて、楽しそうに話していただいた。彼は研究所長のジョルジュ・シャポー教授に紹介して下さったおかげで、ビブリオテックは自由に利用することができた。彼はフランス全土の土

地利用図作製に取り組んでおられた。そうしてフランス諸地域のフィールド・ワークに関して、いろいろと私の素案に助言を下さり、現地のメーリー（市役所・町村役場）に電話で連絡をとってくださった。

IV. アルベール・ドマンジョンの生涯と業績

ソルボンヌの地理学教授、アルベール・ドマンジョン Albert DEMANGEON (1872 ~ 1940) は、パリで生まれ、1940年7月25日、パリで没した。遺影を見ると、上品でひげを生やしている。中柄のように推察される。彼の生前には単行本はなく、地理学年報（アナル・ド・ジェオグラフィ）その他の研究報告書に発表した論文ばかりである。しかし、いずれも水準が高く、評価されていた。私はかつてジャン・ゴットマンが彼の助手を務めていたことを述べたが、このことからドマンジョンの研究水準が高かったことが推しはかれよう。

彼自身の生前における単行本はないが、死後にかつての地理学研究所の同僚であったエマニュエル・ド・マルトンヌが中心となって単行本としたのが、『人文地理学の諸問題』 *Problèmes de géographie humaine* pp. 405, 1947、アルマン・コラン出版社刊行、である。この著作物のおかげで、アルベール・ドマンジョンの生涯と業績の全容を知ることができる。私は、1950年1月23日に購入している。原書の購入が困難な時期のことである。

本書の序論部分は、先述のエマニュエル・ド・マルトンヌによるアルベール・ドマンジョンの研究概要、彼による出版物のリストにあてられている。研究報告は、1902年の『カイ

ザーシュトゥールからブリスガウに至る地理学への寄与』（アナル・ド・ジェオグラフィ、巻56号）である。ドイツ南西部の小さな村落の地誌である。なんと小さな村落を取りあげたことか、と疑いたくなる。この論文を踏み台にして、翌1905年、彼は『ピカルディー平野：ピカルディー、アルトア、カンブレシス、ボーヴェーシス、フランス北部の白亜層平野に関する研究』pp. 495、をアルマン・コラン社から出版した。この書は地誌研究のモデルと評価された評判の高い地誌書であって、これによって、彼はフランス地理学界における地歩を固めた。

彼は1902年以来、1940年に至るまで数多くの研究をいろいろの機関紙に発表しており、『フランスに関する諸著作のレビュー』は、没後の1941年に『アナル・ド・ジェオグラフィ』に発表されている。同じく彼の師にあたるヴィダル・ド・ラ・ブラーシュとルシアン・ガロアとの共同編集した『世界地理』では、『フランスの経済・人文地理学』を担当したが、この大部の著書が出版されるのを待たずに、残念ながらこの世から姿を消してしまった。

V. 『人文地理学の諸問題』 *Problèmes de géographie humaine* の概要

目次を含めると407ページに及ぶ本書は、かつての同僚エマニュエル・ド・マルトヌの解説部分が10ページ、研究論文を年代順に挙げたリストが12ページに及んでおり、そのあとに続く本文は、第I部が地理学通論、第II部が地誌というような構成である。

これらのうち、第I部の通論では、1) 人文地理学の定義、2) 人口過剰、3) 経済の諸問

題（国際経済の現在における諸側面、国際経済の新しい諸側面、鉄道と道路）、4) 農村集落（ヨーロッパ西部における農地制度の集落様式に及ぼす影響、農村集落の地理学、農家の分類に関する試論）、などがとりあげられている。これらのうち、4) の農村集落 *habitat rural* に関しては、フランス西部の散居と東部の集居という二つのタイプが対比され、このようなタイプの違いは、自然条件の違い、社会条件の影響、農業条件の影響、などによるものと分析している。そうしてドイツ学派の平面形態論とは異なり、1) 輪作する村落、2) 隣接耕地の村落、3) 分散耕地の村落、というように集居村落を機能的に分類する。これに対し散居村落については、1) 歴史的に、最初から、つまり古代からの分散、2) 挿入された分散、3) 二次的分散、4) 近代における一時的分散。このように機能的な分類を行っている。

本書の第II部は地誌研究をまとめたものである。彼が取りあげた地域は、フランス中西部のリムーザン、北部、北海（漁港）などの国内にとどまらず、鉄鋼業のダルー（アメリカ合衆国、ミネソタ州中北部）、アフリカ中部のニジェールなどが分析の対象となっているが、その数は少ない。

アルベール・ドマンジョンは、パリ生まれの純粹のパリっ子であった。しかしパリ市内に関する研究は全く行っていない。彼の関心はフランス全域および範囲は広くないが、わずかながらの海外地域であった。彼はパリ大学教授であったことから、パリに強い愛着をいただいていたと思われる。だからこそ、研究対象地域をパリ以外にとり、冷静に、客観的に観察する必要があったものと、私は考える。